

育った環境と性格形成の関連

長野県短期大学 国際地域文化専攻 15129 細川茉佑子

先日は、調査に参加していただき、ありがとうございました。研究結果がまとまりましたので、お礼とともに報告させていただきます。

問題

私達がそれぞれ違う顔をしているのと同様に、性格も似ている場合はあっても、すべての人が一人ひとり違った性格であると言っても過言ではない。人が生まれた時の状態は白紙であって、どのような人間になるのかは全くの誕生後の経験のあり方によって規定されるという説がある。本論文では、性格形成において家庭環境が大きく影響しているのではないかと考え、特にきょうだい関係、家族関係、幼少期に遊んできたものに焦点をあてた。これらがどのように性格形成に影響を与え、そこにどのような違いがあるのかを調べることを目的とした。

方法

調査対象者は、長野県短期大学国際地域文化専攻の2年生31名(男性4名、女性27名)および、1年生5名(全員女性)の計36名であった。調査の方法はアンケートを取り、家族構成、きょうだい関係、趣味などを聞いた。加えて、日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIP-J) を用いて性格の違いとその原因を検討した。この Ten Item Personality Inventory は、ごく少数の項目からビッグファイブと呼ばれる5つの要素から性格の特徴をとらえるものである。この5つとは、Extraversion (外向性)、Agreeableness (協調性または調和性)、Conscientiousness (勤勉性または誠実性)、Neuroticism (神経症傾向または情緒不安定性)、Openness to Experience (Openness:開放性)である。具体的には、「活発で、外交的だと思う」など10項目に対して、7件法(1: 全く違うと思う~7: 強く思う)で回答してもらった。

結果

まず、きょうだいがいる人とひとりっ子で性格の違いを検討したところ、外向面で特に違いが見られた。この外向面とは、社交性や活動性、積極性を表しており、きょうだいがいる人に比べてひとりっ子は低くなる結果であった(表1)。

次に、きょうだいの中での立場(第一子、中間子、末っ子)によっても性格に影響があった。具体的には全体的に中間子が高い結果であった。しかし、神経症傾向の面では第

一子が最も高かった。この神経症傾向とは環境刺激やストレスに対する敏感さ、不安や緊張の強さを表している(表2)。

表1 ひとりっ子ときょうだいがいる人の性格の傾向

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性
ひとりっ子	6.80	9.80	7.00	9.00	8.80
きょうだい	8.26	9.94	6.39	8.68	8.16

表2 きょうだいがいるひとの立場による性格の傾向

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性
第一子	8.06	9.56	6.06	9.00	7.88
中間子	8.50	10.42	6.83	8.33	8.67
末っ子	8.33	10.00	6.33	8.33	7.67

考察

本研究では、親子関係、きょうだい関係において性格に差があることがわかったが、幼少期の遊びについては性格形成に差はなかった。昨今、子供の性格形成において遺伝や育成環境、子供のころの遊び方や勉強が影響しているといわれている。しかし、今回の研究から、子供の性格形成において幼少期に遊んできたものはあまり影響がないことが言えるだろう。このことから、性格形成において大きく影響するのは遊んできたものなどではなく、親子関係やきょうだい関係など、人との関わり合いが大きく影響しているといえるだろう。

子供の性格を形成する要因について理解を深める有益なデータを得ることができました。なお、質問がある場合には hosomayu14@yahoo.co.jp までメールをいただければお答えいたします。今回は調査にご協力いただき本当にありがとうございました。

国際地域文化専攻 細川茉佑子

反抗期と親子関係

多文化コミュニケーション学科 国際地域文化専攻
氏名 西澤清楓

先日は、調査に参加していただき、ありがとうございました。研究結果がまとまりましたので、お礼とともに、報告させていただきます。

調査目的

近年、思春期に反抗期がない子供が多いという。NHKのウワサの保護者会(2016)という番組において、大学生 300 人にアンケート調査を行ったところ、54.7%の人が「自分には反抗期がなかった」と回答した。思春期に反抗期がないことに対して、中学生を対象とした調査を行った深谷(2004)は、「反抗期が、子どもが親から自立する過程だとするなら、反抗期を持たない生徒はどう親から自立するのかが気になりとなる。」と述べている。このように、反抗期がないことに対して賛否がある中で、反抗期の有無を比較した研究は多くない。そこで、本研究では、反抗期がある人とない人を比較した場合、その親子関係にはどのような違いがあるのだろうか、反抗期があることで人は自立することが可能なのだろうかという点を反抗期の内容を含めて検討していくことを目的とした。

方法

本学の学生 46 名(うち男性 3 名、女性 43 名)にアンケート調査を行った。反抗期があった人に対しては、反抗期の開始・終了時期、反抗期中の家族への態度、反抗期中と反抗期後の父親・母親への信頼感、反抗期の影響について質問した。また、反抗期がなかった人に対しては、父親・母親への信頼感、反抗期がなかったことの影響と反抗期がなかった理由について質問した。

結果

反抗期の開始時期は中学生が多く、終了時期は高校卒業時から最近であることがわかった。反抗期中の態度は、父親・母親・きょうだいに対して、反発したという回答が多かった。

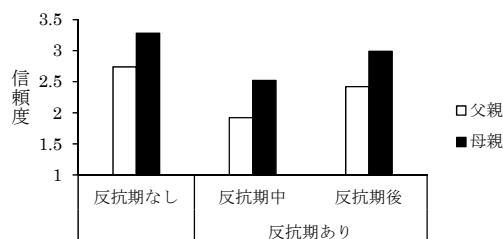


図1 反抗期中と反抗期後の父親・母親への信頼感比較

図1では、反抗期中と反抗期後の信頼感の比較を表した。その結果、反抗期があった人となかった人ともに、父親より母親の方が信頼感が高い結果となった。反抗期があった人では、反抗期中より反抗期語の方が、どちらも信頼感が高くなった。また、反抗期の有無についての影響として、反抗期がなかった人より反抗期があった人の方が、精神的に自立できたと回答した人が多かった。反抗期がなかった理由については、親とは友達のような対等な関係であったという回答が得られた。

考察

調査の結果、反抗期は自立に必要であるとわかった。また、反抗期がなかった理由として、親と友達のような対等な立場であったという回答が得られた。このような、親子関係は友達親子と呼ばれ、その賛否を論じられている。しかし、重要なのはその関係性であり、子どもにとって友達親子であることが成長していく上で何かの障害にならないのであれば、友達親子でも問題ないと考えられる。これは、反抗期の有無にも関係しており、反抗期があるから良いなどと言えるわけではなく、その反抗期が、子どもが成長する上で必要な内容でなければ意味がないだろう。

伊藤(2013)は、反抗期は有無に関わらず、親子関係がタテからヨコの対等な人間対人間の関係に結び変えられているかどうか「鍵」とであると指摘している。このことから、反抗期の有無だけでなく、その内容を吟味していくことが必要であると考えられる。

この結果を参考に、反抗期の有無が親子関係にどのような影響を与えていくのかを議論していきたいと考えています。なお、質問がある場合には、nishizawa0427@gmail.comまでメールをいただければ、お答えいたします。今回は調査にご協力いただき、本当にありがとうございました。

長野県短期大学 西澤清楓